

るため今のところ断定し難い。

こうした点について何か良い資料があればぜひ御教示

大友氏の歴代墳墓を巡る (二)

第三代 大友頼泰の墓

墓地 東植田徳ノ尾

墓 五輪塔 (無銘)

常楽寺に行く道を大楽寺で教えられた。三愛病院を左折して、大分川の支流七瀬川を渡る。高瀬石仏はこの近くである。狭い道を霊山の方に登ってゆくと、直ぐ向うに高崎山、左方に由布、鶴見の山々が、手近かにぽっかりと浮ぶ。誰かの詩に「一步、歩高く光景現わる」とはこのような景観であろうか。其の昔、大友頼泰がここに狩猟に訪れた時、霊山から眺望する美観に魅せられて、ここに隠居寺を建てたのが常楽寺であるといわれている。

下さることをお願いして、勤番日記の紹介を終わることにしたい。
(以上)

古藤 田 太

(会員・弥生町江良)

霊山の下方に延々と流れ来る大分川は、見わたす限りの広大な平地をつくり、府内の町は豊国とよくにの中心として育ったものである。

行くうちに大分市が建てた「大友頼泰公墓所」の案内板が目につき、墓所はすぐわかった。あたりは段々畠の蜜柑園が重なるようにして続いている。一群の雑木の蔭に、いかにも年代を偲ばす、苔むす石垣をめぐらした二坪足らずの狭い墓域に、二米近い堂々たる五輪塔が静寂のうちに建っていた。水輪は半ば欠け落ちているが、概ね整ったもので、威圧感さえある程の立派なものである。側に小さく、苔の中に、辛うじて形をとどむる五輪塔が

二基並べられてある。頼泰ゆかりの者の墓であろうか。案内板に「松野系図によると、頼泰は貞応元年（一二二二）に生れ、正応五年（一二九二）に隠居、正安二年（一三〇〇）九月二十七日逝去、七十九才、常楽寺に葬る」とあり、又同系図によると、「墓土饅頭、延享元年甲子春有之云々墓印写之也」とある。と揭示されてあった。この五輪塔は延享元年（一七四四）以後のものであるらしい。然し塔そのものは、鎌倉様式を残していると思われる。

私は直ぐ近くの常楽寺（臨済宗妙心寺派）を尋ねた。



大友頼泰の墓

あいにく住職不在であったが、若嫁さんが本堂に案内して呉れて、私の求めに応じて頼泰公の位牌を拝観させていただいたが、金泥からみると可成り新しいもののよう

に思われた。
常楽寺殿従五位上前二豊国司兼丹後刺使道忠公大禪定門常楽寺の寺伝は、奥様から見せていただいた記録からは、徳川期元禄中高瀬の永富家から笠雲禪師（宝永二年還化）が寺に入り、常楽寺を再興して開山となる。現在の住職は十三代目であった。常楽寺の元禄期までは不詳のようである。

大友頼泰は、我国最大の困難といわれた元寇の役の最高の現地責任者として活躍した人で、元寇を抜きにして頼泰を語ることはできないばかりか、頼泰は生涯を元寇に捧げた人と言いたい。

鎌倉幕府は、元軍（蒙古軍）の日本侵寇の風聞に接すると、急ぎ臨戦体制を固めることにした。元軍防禦のため、鎮西諸国に關係をもつ御家人の鎮西下向や帰国を命じた。大友能直以来、豊後、肥後、筑後に守護職として關係をもつ頼泰にも、幕府の御教書が発せられたのは当然で、文永八年（一二七一）九月頃のことであった。頼

泰は下向準備にかかると共に、先づ小田原景泰を代官として下向させた。幕府は元軍の上陸を窮う地点は肥前、筑前海岸と予想した。文永九年二月頃になると、幕府は、肥前、筑前の守護職であり、従って軍事権をもつは武藤（少弐氏）^{すげふし}資能であるにもかかわらず、大友頼泰に自分の奉行国（豊後、肥後、筑後は勿論、この場合日向、大隅も含まる『大分の歴史』③）内の御家人を動員して、肥前、筑前の警固に当てるべく、又総括的、最高の軍事権が頼泰に与えられた。（文永十二年から武藤氏にも普通の守護職権以上の権限が与えられた）。頼泰は本来ならば六波羅のもつ権限を元軍侵寇という非常時の前に、異例のかたちで、軍事統率権を与えられて鎮西の一致体制をとることとなる。

敵国元は、文永十一年まで四回に及ぶフビライの国書をおくってきている。蒙古軍二万、高麗の助征軍五千六百の軍団といわれ、九百の兵船で博多湾に侵寇してきた。十月十五日のことである。戦は昼夜の別なく続けられ、二十日夜博多湾を襲った暴風雨という「天の時」に恵まれて、急変して日本の勝利となったが、この間に日本本土の危惧は大変なものであったが、その様相は『八幡愚

童記』、蒙古襲来絵詞『高麗史』『高麗史節要』等に詳細に述べられている。元軍の戦法は、我國の將兵は勿論、馬匹に至るまで全く困惑させ、混乱させた。島々の住民の虐殺を行い、博多、箱崎の陸上戦では、日本軍は圧倒され、席捲されておびただしい死傷者が続出して大敗北を喫した。

○大友は子ども打ちつれ落ちゆきて方々にこそ頼泰みけれ
○臆病をいかが少弐の入道が恥を覚恵の名にぞ落ちける
当時の狂歌は最高指揮者達をこう風刺した。

文永戦後、幕府は頼泰に「戦場に臨んで戦わず、口実をもうけて馳向わなかった將兵があまたいたことは不忠ではないか。向後若し忠節をいたさざれば、罪科におこなわるべきなり」と布告した。又特に注意をひくことは、「非御家人でも忠節を尽せば恩賞をつかわす」ということであったが、当時の緊迫した情勢と幕府権力を充分うかがうことができる。

頼泰は戦後処理を急ぐ必要があつた。元軍の再度の襲来は必至と考えられたからである。

元軍の侵寇を防ぐには、進攻拠点である高麗を攻撃せんとする計画とともに、肥筑の海岸線に石築地の防塁を

長蛇の如く築くことであった。又警固番役の制度を強化することも必要であった。それにしてもおびただしい傷病者をどのように扱うか、士氣にも影響することであつた。

一遍上人が時宗^{ビシムツ}を開いたのは建治元年（一二七五）のことである。その翌年九州遊行を行った。時恰も文永戦（一二七四）の二年後である。九州全土は再度の元軍の襲来に備えて、筑前箱崎から今津あたりまで延々と石塁を築くのに騒然たる有様であつた。陸上戦によって生じた傷病者の治療は、当時としては薬草、薬湯以外には、温泉治療が選ばれた。この温泉療法は一遍上人が蒸し湯の法を教え、別府鉄輪温泉で実施して卓効を挙げた。現在、別府市の温泉本に温泉山永福寺があるが、その昔はこの寺を松寿寺と呼んだのも、一遍上人の幼名松寿丸からとつた寺名であらうかと伝えられている。この松寿寺は大友頼泰の寄進によって創立され、又頼泰自身、一遍上人に帰依して時宗を保護した。又瑞光寺にいた他阿上人真教は一遍上人に師事することゝなったが、一年後には一遍に附添い四国遊行に渡海して行つた。この大友頼泰と他阿上人が相計つて、元寇後の傷病者を治療する救

いの手を差しのべたことは忘れてならないことかも知れない。

一遍は四国道後温泉近くで生れ（父は河野七郎通広延応元年生る）、温泉が傷病者の治療に効果を挙げる方法を知つていたのであらう。

文永戦で日本攻略に失敗したフビライは、二度にわたつて使者をおくつて来た。執権北条時宗は最早や問答無用とばかり、鎌倉と博多に於て斬首した。建治元年（一二七五）九月七日のことであつた。元使一行は、鎌倉竜の口に引き出され、斬首する旨申渡されると、少しも騒がず、正使、副使共に紙と筆を求めて辞世の詩をしたためた。

杜世忠（蒙古人 三十四才）

門を出づるに妻子は寒衣を贈りたり。

我に問う、西に行き幾日にして帰ると。

来たる時、若し黄金の印を佩びたれば

蘇秦を見て機を下らざるなかりしものを。

蘇秦は前三世紀、戦国時代の人。西方の秦に対する六国同盟をなしとげ、ついに、六国の宰相たる印を佩びた。機は、織物に用いる「はた」後の二行は幕府の冷たい処置を歎いたものか。

弘安四年（一二八一）五月二十六日に東路軍四万（兵船九百隻）が壱岐に来寇、六月六日には博多湾に出現、六月下旬に江南軍十万（兵船三五〇〇隻）が来航、平戸島附近で両軍が落合い合同作戦に入った。日本軍の防塁の整備と、敵を待つ気概が、本格的な陸上戦を阻止し、島嶼戦に極限した。志賀島伝いに博多に攻め入らんとする元軍と、我が豊後勢は攻防戦を展開したが、大友頼泰の嫡男親時（大友氏第四代）が奮戦したのもこの時である。昼夜の別なく繰返された合戦も月を越し、七月三十日の夜、又もや暴風雨が吹き荒れて、一夜のうちに敵船は海中に没するか、破砕するかして戦力を失った。平戸島に上陸していた張僞軍がわずかに難を免れただけであった。日本軍は急ぎ残敵掃蕩戦に移り、八月七日頃までに捕虜だけでも数千人を数えたが、このうち戦争に狩り出された宋人は斬殺を免がれて奴隸として扱われ、他は殺されたようである。

元寇の役は、戦費を自弁しなければならない御家人にとって大きな負担であった。また日本軍が戦勝したとはいえ、寸土も増加したわけでないから、勲功の賞にあたっては大きな問題があった。このことは第一回の弘安役

の授賞が弘安九年十月に行われたのを見ても推察できよう。又弘安役の後、御家人の間で訴訟問題が多発した。各国守護はこれを裁断する権限を与えられていたが、最終の裁断権は六波羅や鎌倉にあった。

弘安七年（一二八四）九月、大友頼泰等は特殊な合議制の訴訟機関をつくったが、充分の成果を挙げることなく、鎮西談議所の設置となった。弘安九年（一二八六）七月の御教書は、大友頼泰、少弐経資、宇都宮通房、渋谷重郷の四名の合議で裁許せよというのである。これが談議所と一般に呼ばれて八年間存続したが、これも最終裁判所権を保有する訴訟機関の充実が要請されて、正応五年（一二九二）鎮西探題の設置となった。北条兼時が探題として赴任する狙いは、異国警固という軍事統帥であったが、実質は訴訟や土貢（税）の沙汰の処断を行う最大機関となった。

元寇役後の戦後処理に大いに努力してきた頼泰も七十才の高齢となっていた。強力な鎮西探題の開設を機に隠居したものであろう。その後、永仁七年に鎮西評定衆ができ、またこれを補強するために引付衆の制度も生れた。この中に、後に大友氏第五代家督となる貞親の名が見え

る。

頼泰が豊後に下向して、早や二十一年の歳月が流れ、二度にわたる元寇の合戦、又困難な戦後処理と、尚続く警固番役の問題、東方鎮西奉行として骨身にしむ苦勞を重ねて来たのであるが、それにしても此の頃、北条氏一門が探題はじめ所領所職に侵出しはじめたことは余りうれしいことではなかった。

隠居して、度々常樂寺を訪れ、またここに滞在する時

が最も自由で、過去の追憶をたどる好い時間であった。隠居寺常樂寺からは、真向いに高崎山や別府、雲の果てに太宰府も指さすことができた。

稲日野も行き過ぎがてに思へれば

心恋しき可古の島見ゆ（万葉歌）

しかし、困難を乗りきった国史上の人物が、老残の身をいたわった霊山の地で、最後に与えられた永遠の棲家は土饅頭一つであった。（つづく）

佐伯地方の石塔（一）

五十川 千代見

（会員・弥生町提内）

一 瓦塔

江戸期には、弥生町大字門田字須平には瓦師がいたが、いつ頃から瓦焼を始めたのか、いつ頃まで続けられていたのか不明である。屋根瓦だけでなく仏塔なども作られ

ていたようである。

瓦製は壊れやすいために現在残っているものは僅かである。先日須平地区の旧墓地を歩いてみたが、瓦製の壊れた墓石が一基と仏塔二体を見かけた。ある家の人に瓦焼の話をする、うちにも荒神様があったが新築してか